

2年間で自立への基礎を養う生活科カリキュラム — なかまづくりからじぶんづくりへ —

岩田 龍明

岐阜聖徳学園大学附属小学校

Two years in developing a foundation for environmental studies Fostering cooperation and independence

Tatsuaki IWATA

キーワード：自立心 協同性 幼児期の終わりまでに育てたい姿 自分自身の成長

I. 関心の所在及び研究の目的

今日、カリキュラムマネジメントの必要性が叫ばれている。特に、資質・能力をベースにした学びや育ちを系統的につなげることが求められている。

カリキュラムマネジメントについて村川は、「全ての教科・領域において、また、若手や中堅、ベテランを問わず、全ての教師はカリキュラムの計画や実施、評価にかかわっている¹⁾」と述べている。つまり、学級担任それぞれが、カリキュラムづくりに参画する必要があるということである。

平成27年度入学の1年生、平成28年度には、2年生を担当し、この間に生活科を研究教科にして、実践に取り組んだ。本論では、特に2年生担任時に取り組んだ実践を振り返り、生活科を中心にしたカリキュラム開発や単元開発について述べたい。

資質・能力に焦点を当てる中で本論文では、平成28年12月21日に出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善および必要な方策等について（答申）」に記されている、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」に着目した。その10の姿の中でも、「自立心」と「協同性」が、生活科の学習において、重要な資質・能力だと捉えた。上述した2つの姿については、以下の通りである。

表1 「幼児期の終わりまでに育て欲しい姿」の「自立心」と「協同性」

<p>自立心…身近な環境に主体的に関わり、いろいろな活動や遊びを生み出す中で、自分の力で行うために思い巡らしなどして、自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げることで、満足感や達成感を味わいながら、自信をもって行動するようになる。</p> <p>協同性…友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる。</p>

そこで本研究では、「自立心」と「協同性」に重点を置いた単元開発に取り組むことで、子どもたちがどのようにそれらの資質・能力を伸ばしていくのかについて明らかにする。

II. 研究の方法

本論文では、2つの視点から実践を分析する。1つ目は、幼小接続カリキュラムの視点である。幼小接続カリキュラムにおいて、「教育観や教育理念はもとより、指導内容の教育方法などの共有化が必要²⁾」と木下は述べている。これまでの研究では、主に教育方法や、時間割の工夫など、システム的な要素に目が向きがちであったように思える。そこで筆者は、第1学年における育てたい姿を、「なかまづくり」（＝協同性）と「じぶんづくり」（＝自立心）と捉え、遊びを中心にした実践に取り組んだ。遊

びの実践に取り組む際、子どもたちが幼稚園で育ててきた、「自立心」や「協同性」³⁾に着目して、単元の構想を行った。これについては、平成27年度の実践「じぶんであそぼう みんなであそぼう」に詳しい。⁴⁾

2つ目は、第1学年と第2学年の接続という点である。2年間で自立への基礎を養うためには、第1学年で育った「なかまづくり」の力を十分にいかし、「自分づくり」へとつなげていく必要があると考えた。そのためには、自分自身と対象との、あるいは自分と自分自身のかかわりについて、振り返り、価値づける活動が必要と考えた。

本論文では、まず筆者が担任をした平成27年度・第1学年および平成28年度・第2学年のカリキュラム開発について述べたい。ここでは特に、それぞれの年度に取り組んだ研究単位について示すことで、カリキュラム開発について述べたい。次に、その中から、筆者が第2学年2学期に取り組んだ実践である『みんなでつながる じぶんとつながる』を中心に、小学校生活科で育む「自立心」と「協同性」について考察する。なお、平成28年度第2学年で実施した単位については、資料1を参照されたい。

Ⅲ. 「じぶんづくり」「なかまづくり」を中心に据えた単元開発

ここでは、筆者が2年間で取り組んだ生活科の研究単位について述べる。田村は、カリキュラムマネジメントの目的の一つとして、学校の教育目標を具現化し、めざす子どもの姿として表現することを挙げている。) 前述した村川の考え方とつなげて考えると、教師一人一人が目指す子どもの姿を明確に描き、日々の教育活動に取り組む必要があると言える。そこで筆者は、「じぶんづくり」「なかまづくり」をテーマにし、カリキュラムマネジメントに取り組んだ。ここでいう「じぶんづくり」とは、前述した「自立心」に当たるものであり、「なかまづくり」とは「協同性」のことを指す。「じぶんづくり」「なかまづくり」について、第1・2学年それぞれに設定をした。各学年で育てたい姿については表2の通りである。

表2 生活科で育てたい「じぶんづくり」「なかまづくり」の姿

第1学年	<ul style="list-style-type: none"> ○遊びを中心にした単元に取り組むことで、自分の願いを明らかにしたり、仲間に声をかけたりすることができるようになる。 ○自分の願いと仲間の願いの両方の実現を目指し、活動しようとする。
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ○自分について振り返る学習を通して、自分自身のよさや、これから成長したいことを見つけることができる。 ○仲間のよさに気づき、仲間の存在に学ぶことができる。 ○仲間から評価されたり、自分自身について自己評価したりする中で、自分のよさに気づき、前向きに生きようとする。

第1学年では、「じぶんであそぼう みんなであそぼう」という、新聞紙や段ボールを使って一人遊びや集団遊びを創り出す学習に取り組んだ。この単元で言う「じぶんづくり」は、自分の力で遊びを作ったり、遊び自体に没頭したりすることである。また「なかまづくり」は、自分から周囲の子に声をかけて仲間を誘ったり、遊ぶ目的が同じ子同士が集まったりして遊ぶことである。この学習を通して子どもたちは、遊びの中に込めたお互いの思いや願いを話し合いながら、学級みんなが遊びを楽しむという願いを実現させて欲しいと考え、単元を構想した。

一方で、第2学年の「じぶんづくり」は、より良い自分に向かっていくことと設定した。そのため「なかまづくり」においては、仲間のよさを見つけ、自分の中に「友達のようにになりたい」という視点

をもつことが、よりよい自分に向かうきっかけになると考えた。自分自身のよさが増えたり、さらに成長していることに気付いたりすると、成長することへの達成感も味わえる。「なかまづくり」においては、他者から認めてもらえる場があることで、子どもたちが自分自身のよさを実感できるように単元を構成した。

IV. 第2学年・生活科「みんなでつながる じぶんとつながる」の考察

1. 単元の概要

「みんなでつながる じぶんとつながる」は、内容（9）自分自身の成長を核として、学習対象を、友達、自分のことと設定した単元である。本単元では、次の3つの学習活動を繰り返し行ってきた。

表3 第2学年・生活科「みんなとつながる じぶんとつながる」 単元概要

- ①自分自身の生活の中で、感じたことや考えたこと、できるようになったこと、成長したと思うことについて記録をする。
- ②月に2回、その記録を振り返り、特に自分が成長したと思った日のできごとについて取り出し、すぐろくのますとして新たに意味付ける。
- ③自分の成長について語り合ったり、仲間の成長について聴き合ったりし、新たな課題の発見や他者との比較から自分の成長を再発見する。

以上の3つのことを繰り返し行う中で、自分自身に課題を見出しながらも、自分自身や仲間の姿を肯定的に捉え、互いに高め合いよりよく生きようとする子どもの育ちを目指し、実践した。

また、本単元では次の4つの教具を用意した。

(1) 毎日帰りの会で書く、振り返りシート

その日の出来事や考えたことを記録するワークシートを用意し、主に帰りの会で記入した。これは、日々の成長を書き記したり、失敗したことを振り返ったりして、記録をする意図で提示した。

(2) すぐろくのます

半径10cmほどの円形のすぐろくのますと、それを貼付けるB5サイズの画用紙を用意した。日々の生活でも、成長したり悩んだりするように、すぐろくには、進むますと止まったり戻ったりするますがある。振り返りシートで書いた記録を、すぐろくのますとして書くことで、より強く成長を実感することができる考えた。ただ写すだけでなく、どのような力が伸びたのかということも意識させて書かせるようにした。

(3) 「わたしのよいところ 教えて！」シート

これは単元の中盤、11月ごろから学級活動の時間と合わせて取り組んだ。仲間から自分のいいところについて教えてもらったり、評価してもらったりすることをねらいとして用いた。仲間のいいところを付箋に書いて、交換し合わせた。付箋については、いつでも使えるよう教室に置いておいた。子どもたちが朝来ると、友達のいいところを書き、渡し合っていた。

(4) 「こんなにあるよ わたしの『伸』」

自分が見つけた、自分自身の成長について、箇条書きのように、書き出していくシートであり、自分

で自分自身の成長について、視覚的・量的に実感できるようにすることを目的とした。

本単元は2学期の初めから終わりまで継続した本単元は、9月13日、9月30日、10月18日、10月27日、11月2日、11月18日、12月1日、12月16日に実践した。それぞれ、2時限を1コマとして、合計8回、全16時間完了で取り組んだ。それぞれの授業で、自分自身の成長を表す、すごろくのます作りに取り組み、自分自身の成長を振り返りシートから読み返してから記述をした。それを、仲間に自慢するというように、学級での話し合いを行った。すごろくのますが増えることは、自分が成長したり、苦手なことを乗り越えた証拠であるし、そこには友達から認められたり、支えられた経験が位置付くと考えた。

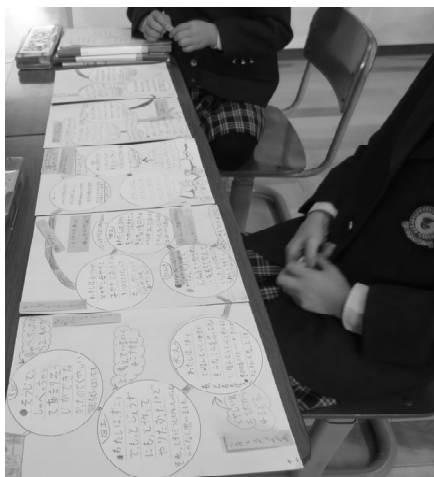


図1 子どもが作った成長すごろく



図2 お互いのいいところを付箋に書いて交換する

V. 実践の考察

事例1 「じぶんってすげえ」と感じるA児

児童Aは、非常に言葉が豊かで、野菜の栽培や生き物との関わりが好きで、知的好奇心の旺盛な児童である。知的な力を発揮する一方で、自分の感情コントロールが苦手であり、自分のできなさや欠点に目が向き、学習に集中できないこともまれにあったため、以下抽出児として考察する。

○仲間から学び、位置付き始めるA児

A児は、自分が成長したことについて、なかなか自分で示すことが苦手だった。しかし、10月28日の振り返りには、「(すごろくづくりをしていたら)ぼくはもっと伸(=自分自身の良さや成長)を見つきたいです。」と、自分なりに見通しをもとうとした。

しかしA児は、11月1日「教えて!わたしの自まん!」というお互いのよさについて伝え合う学級活動における学習で、仲間から「Aくんは、みんなにやさしくなっている。すぐにおこらなくなったところがいいところだよ。」と認められたことをきっかけに、自分の良さに着目し始めた。

○仲間に感謝するA児

体育「とびばこあそび」でA児は、なかなかとびばこの着地がうまくできずにいた。11月8日の振り返りでは、「みんなのちやくちはどうやってうまくいくか見ていると、地面に力を入るってことをべん強して、今日ちゃんとちやくちができたので、みんなにありがとう、自分にありがとう。」と振り返っている。

○「今日はじまんするぞ」と意気込むA児

朝の会で毎日取り組んでいた話し合いの前にA児は、11月18日「よし、今日はじまんするぞー」といつもより一層意気込んで登校した。

その日の話し合いの中で、「ぼくは、なかまから学んだことを、自分にいかすことができるようになっていきます。そこが自分の伸だと思えます。」と語った。そのことをきっかけに学級の仲間たちも、「さわやかなあいさつができるようになってきた」「かかりのしごとを自分から、2組のためにできるようになってきた」と話した。このことについて、「自分で自分にめいれいすることができるようになったから、できるようになったんじゃない？」と学級の仲間が付け足した。この一連の話し合いを受けてA児は、「ぼくはもっと自分のことを自まんしたいと思っています」と、その日の振り返り、「すげえ自分」と自分自身について価値づけた。

○伸びた自分を実感しさらに伸びようとするA児

12月20日、「みんなでつながる じぶんとつながる」の最終時、A児は、「(今日のじゅぎょうで自分の伸について自まんしたとき)『もっともっともっともっともっと伸ばしたい』と心の中でそう言っていました。だから、これから先もっともっともっともっと伸ばたいです。」と振り返っていた。

○A児の学びから

A児は、「とびばこあそび」の姿から、「諦めずに取り組もうとする」という自立心の表れが読み取れる。その自立しようとする姿は、仲間のがんばる姿に支えられている。お互いの協同性が働き合うことにより、A児は「自分自身ががんばれば、苦手だったこともできるようになりそうな存在」という実感を得ることができた。さらに、そのことが積み重なったり、仲間から認められたりことで「すげえ自分」という、自慢できる自分に変わってくる。これからの自分は、多少のことなら努力すれば、成長してきそうだという、自信である。だからこそ、A児は、「これから先もっともっともっと伸ばしたい」という記述は、自分が完璧ではないことを理解しつつ、自分が前向きに自立して生きようとしている姿だと言える。

事例2 「わたしていいところあったんだ」と実感するC児

C児は、自分のことを話すのが大好きである。自分のことを話したいがために、ついつい他の人の話に割って入ることもしばしばであった。その一方で、仲間の話になると、興味をしめさないことが多くあった。仲間との関係作りをする力を高めたく、抽出児として考察したい。

○C児の振り返りシートから

C児の振り返りからは、友達を評価したり価値づけたりする記述が表4から多く読み取れる。

表4 児童Cの友達を評価する記述のある振り返りシートの記述

10月3日	(芸術鑑賞会の楽器演奏で) 友達ががんばっているのをみてとてもうれしかったです。…これからもがんばってもらいたいです。
10月4日①	(朝の話し合いの時間)でどんどんことばがふえて行ってとてもうれしかったです。…みんなの(考えやアイデアの)はつめいがあると、いい2組ができそうだからです。
10月4日②	(話を聞くときに) あいての顔をみるというのがまもれている…自分ももっとがんばりたいとおもったし、みんなものばしてほしいとおもいました。

10月25日	(生活科で動くおもちゃを作っている) Eさんが上手だったから、しかもまだ(自分が)上手にできていないときだから、おしえてもらってそのやりかたや形をくふうしてよくとんでやっばりおしえてもらうのは、だいじだとおもいました。
--------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

これらの記述でCさんは、仲間の良さを受け止めている一方で、10月の最初の記述からは、その仲間の存在に対して、「自分」の存在が少し遠いようにも捉えられる。

○じぶんの記録をすごろくで振り返ることで、自分の成長に気づき始めるC児

4回目のすごろく作り以降、児童Cは次のように記述を続けた。

表5 4回目のすごろく作り以降のC児の振り返りシートの記述

10月28日	じぶんのことでかける文が長くなったとおもう…いろんなことに伸があるから(いろいろなことにちょうせん)したいです。
10月29日	Dさんに(ばっちゃんがえるの作り方を)きいたらやさしくおしえてくれて、わたしもそうやってやさしくしてあげたいと思いました
11月2日	(すごろくづくりで)たくさんかけていいなあと心の中でおもって…どんどん長い文もちょうせんしていきたいです。
11月8日	とびばこをはこんでいるとき本当はDさんが(とびばこのはんたいがわまで)まわったほうがらくだったんだけど、はやく片付けがおわるように、「わたしがはんたいになるね」といってはんたいになったら早くすんで、じぶんのらくよりみんなにらくしてもらいたいとおもいました。
11月14日	わたしはいつもAさんにおこってばかりだとおもっていたら、そのとどいたほぼがやさしくのがのびたとかかいてくれてさいしょ本当?とおもったけどとてもうれしかったです。
11月17日	わたしはじまんがないとおもっていたけどたくさんあってよかったとおもって、伸っているところにあるんだなあとおもいました。
11月18日	みんなに自分が友だちにやさしくできたこともいってみたら、自分のことや友だちのことを大じにしているということや、(仲間に自分のやさしさが)わかるようにつたえることを伸びたところが3つもあってうれしいです。

11月に入り、自分たちの『伸』について、「わたしのよいところ 教えて!」シートを用いて交流をするとC児は友達から、「いつもやさしくしてくれてありがとう」「たくさんいいところを見つけてくれてうれしいよ」と、肯定的なコメントをもらっている。C児は友達が肯定的に自分を見てくれていることに嬉しく感じ、仲間との関わり方がよくなったことを実感している。仲間に励まされ、自分のよさを実感したC児は、自分のよさについても実感できるようになったと言える。単元の最終時に、話し合いをした後、C児は本単元を次のように振り返った。

表6 C児が自分自身の成長を実感している記述

12月20日	わたしは、みんなの話をきいていろいろ自分からできるようになって伸、それで自分やみんなのことをわかって伸、みんなで伸をたくさんみつけていて…もっと伸をさがすにはどうしたらいいのかな?
--------	--------------------------------------------------------------------------------------------

この記述から、「良いところがないかもしれない」と感じていたC児は、「自分は良いところがあり、これからも成長できる存在だ」と実感していることが読み取れる。

OC児の学びから

C児は単元の当初、自分自身のことを消極的に捉えていた。しかし、単元を通してC児は、「自分にもいいところがありそう」と考えるようになったことが分かる。C児は友達が成長する姿を見て、自分の良さに着目できるようになったと言える。そのきっかけは、自分の行動に「やさしくなった」「いいところを見つけてくれる」という、自分自身への肯定的な価値付けによるものに違いない。自分に対する肯定的な評価をし合える、仲間との協同的な関係によって、C児は自分自身の成長や良さについて自覚し、自立に向かうようになったと言える。

VI. 成果と課題

今回取り上げた単元では、子どもの生活全体を「振り返る」活動を通して、自己をメタ的に捉えていった。その中で子どもたちは、自分自身の成長に気付くことができた。子どもたちは、日々を振り返ることが習慣となり、「3学期になっても振り返りをしたい」と言い始めたほどであった。単元の中で子どもたちは、失敗や困り感を、仲間の力を借りたり自分の力を発揮したりしながら、目指す自分へと成長しようとした。これは、一人一人の子どもの「成長したい」という願いと、その気持ちを受け止めた友達の力に支えられてこそ、「自立心」が育つということを明らかにしている。ここから子どもを生活全体から捉える生活科では、幼児教育で育まれた「自立心」や「協同性」を伸ばすことができる教科だと再認識できた。一方で今後の課題として、生活科の中の内容と「自立心」「協同性」との関連を、さらに理論的に明らかにしていきたい。

おわりに

「幼児教育の終わりまでに育って欲しい姿」にある「自立心」の「自信をもって行動する」とは、一人一人の子どもが、その子なりに試行錯誤し、その子なりに成長をすることが、その子なりの「自立」につながるということである。そして、一人一人の子が、「伸びた」と感じた瞬間を、私たち教師が認め、位置付けたり、学級で共有・共感したりすることで、さらに子どもたちが明確に自分なりの成長について実感できると言えよう。さらに子どもたちの「協同性」の根底には、高め合い成長することを目指して、子どもたち同士が互いを認めたり受容したりできる活動や環境を設定することや、それを見届ける教師の教育観を広げることが重要である。「協同性」を育む人的・物的環境に支えられて初めて、「自立心」が広がり深まることは、先に示した事例から明らかである。

幼児期に芽生えた協同的な関わり方の芽を、遊びという場から、学級という集団の中でも十分に発揮できるような環境（教師、仲間、スタートカリキュラムを含む学校カリキュラム全体、教材などすべて）を整えることが必要だと考える。そのためには、短期的な「親しむ」「引き出す」視野の接続はもちろん、それまでの学びや育ちをつなげ、さらに長期的な「伸ばす」という意味での接続が求められているのではないだろうか。そのような、長期的な視野の接続が生かされることで、子どもたちがそれらの資質・能力を、なめらかな接続が可能になるはずだ。

資料 1

第2学年で取り組んだ単元名	内容(平成 20 年度版学習指導要領に順ずる)と単元の概要
春のまちをたんけんしよう！	(3)、(5) 学校周辺を探検し、春を探したり、地域の人と交流
やさいとつながる	(5)(7)(8)(9) 夏野菜や冬野菜の栽培、収穫を通して、野菜のことを学ぶ中で、自分の成長に気付く
生き物さん、こんにちは	(7)(8)(9) 生き物の飼育を通して、自分の成長に気付く
うごくうごく、わたしのおもちゃ	(6)(9) おもちゃづくりで深まる友達との関わりに気付く
みんなでつながるじぶんとつながる	(8)(9) 本論で示した単元
2組たんけんをしよう！	(9) 仲間との成長を自覚、再確認し、所属意識を高める
みらいにむかって、自分たんけん！	(9) 自分自身の成長を振り返り、自分自身が成長してきたことの尊さと周りの支えに気づき、これからの生きる自信を培う

多くの単元が内容(9)と関わっており、どの学習でも子どもの成長を価値付けようとねらったためである。

注・文献

- 1) 田村知子編著 (2011) : 「実践・カリキュラムマネジメント」ぎょうせい, 25.
- 2) 上掲書 1, 128.
- 3) 中央教育審議会 (2016) : 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校お学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」, 75.
- 4) 詳しくは拙著 (2017) : 「小学校入門期の『じぶんづくり』と『なかまづくり』を求めて 第一学年生活科『じぶんであそぼう みんなであそぼう』の実践から」, 『生活科・総合の実践ブックレット』第11号, 6 頁から19頁に詳しい。
- 5) 上掲書 1, 7 頁を参考にした。